

05 佐土原聡 + 高見沢実 + 野原卓 + 尹莊植

聞き手：奥野、藤井、高橋



尹莊植 ユン・ジャンシク

横浜国立大学工学部建設学科卒業、同大学院修了。08-11年Tomoon Architects & Engineers, 16年横浜国立大学院博士修了。17-19年秋田県立大学システム科学技術学部特任助教。現在横浜国立大学都市イノベーション研究院助教。研究分野：都市計画、まちづくり、マネジメント、条例

野原卓 ノハラ・タク

東京大学工学部都市工学科卒業、同大学院工学系研究科都市工学専攻修士課程修了。00～03年(株)久米設計。03～05年東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻助手。05～08年同国際都市再生研究センター特任助手。08～10年同先端科学技術研究センター助教(09年論文博士(工学)取得)。2010年より横浜国立大学院准教授、11年より現在、同大学院都市イノベーション研究院准教授。一級建築士。研究分野：都市デザイン、都市計画、まちづくり、景観

高見沢実 タカミザワ・ミノル

東京大学工学部都市工学科卒業。同大学院修了。同大学院博士修了。92年東京大学工学部都市工学科助教。96年より横浜国立大学に移り、08年より同大学工学研究科教授。現在、同大学院都市イノベーション研究院教授。研究分野：都市計画、まちづくり、地域、制度、住環境

佐土原聡 サドハラ・サトル

早稲田大学建築学科卒業、同大学院修士課程修了。同大学院博士課程単位取得満期退学。00年より横浜国立大学院教授。現在、横浜国立大学院都市イノベーション研究院教授。01年より東京大学空間情報科学研究センター客員教授。研究分野：都市環境工学、都市エネルギー、都市防災、環境調和まちづくり

答えを出していくかという課題であるという風に捉えるべきものだ」というのは僕も同意見ですね。それで自分で設定した課題を生き生きとやれることが一番いいわけですけど、壁にもぶち当たるし、いろいろある。だから藤原先生がそういう意味で一つ一つプロセスまで含めたコメントしてくれてるのは、すごく意義がありますよね。

高見沢 それは建築設計だけじゃないよね、卒業論文もそうだし、私たちそのものの生き方も賞とりたくてやってるわけではなくて、もうこれはとにかくやりたいって思ってるだけだから。

奥野 さっきの瀬川さんの話(47頁)で出ましたが、A/DとC/Dで評価している視点が違うと思うんですが、具体的にどのような視点で見ているのって思ったんですけど。

野原 僕が卒業設計を見て点を入れる時って、たぶんここにおられる皆さんより若干、建築的スケールにも落とし込めている作品に点をいれることが多いと思います。それは、卒業設計とは、最終的には設計に落とし込んで表現するという場かなと思ってるから、考えたことが最後に場所とか空間とか、そういうものに落とさせているかどうかというのも評価ポイントかなと思ったりもしています。考え方も半分評価しているのだけど、やっぱりそれをちゃんと落とし込んで、自分のものにできたかなみたいなこともなんとなく評価しているところがあります。そういう意味で、コンセプトレベルで終わっちゃってて、変な話、天才だとして一日でできちゃうようなところで終わっちゃったりしていると、ほんととはずごくいろいろ考えているのかも知らないけど、僕もプロセスを知らないから、最後まで落とし込んでやるという意味では、もうちょっとできることがあったのではないかなと思うので、評価が分かれるところだなと思います。

尹 5つの原則を提案できたことだけでも評価できるものだと思います。現実の都市計画を考えると、郊外のロードサイドというのは、都市計画の課題というか、制御できなかったものの一つであって、そこが地方都市の

1 全体の印象・評価の視点

今日はよろしくお願ひします。まずみなさんに今年の全体的な印象を伺いたいんです。それと、今までいるんな人にインタビュしてきて、『仕上がっているようで仕上がっていない』という意見がいくつもあるんです。多分どういう風に評価させるかというのも変わってきている分、突き抜ける作品がないというか、どこに問題があるんだろっかかと思っっています。

高見沢 みんなよかったって言うてるよね。

佐土原 いままで全然形になってない人がいたけど、今年は全体的には底は上の方。でもいくつかいいのはあるけど、突き抜けるものはあんまりなかったかもしれない。

尹 自分の卒業設計の時と比べてみて、一つ思ったのが、当時の二〇〇〇年前半は東京や横浜などの大都市では再開発が進められ、都市が大きく変わっていく時期だったこともあり、大都市への視点が多かったと思います。私も秋葉原を対象としました。でも今回見ると、大都市よりは、地方都市や地域、いわゆるローカルな課題に着目しているものが多いことが大きな特徴だったと思います。あとは、表現力(模型やパースなど)はすごくレベルアップしていると思いました。

藤井

この前、藤原さんにインタビュ(28頁、29頁)したときに、「卒業設計で大事なのは競う事ではなく、自分が問題視していることに対してどれだけ建築で答えを出しているかということだよ。」と言っていたいたんです。だからインタビュの時も、全員一人一人にコメントがあって、誰がずば抜けてよかったということに対しては興味はないとおっしゃっていて、教え方のスタンスの違いがわかったんです。なので、C/D系の人たちから建築設計を評価するときに、どのように思っているのか伺いたいです。

佐土原

それはA/D系の先生方はプロセスも見てるし、自分との戦いでどういった戦いをした結果がこうなっているというのがわかっているんじゃないかな。でも僕らは、結果しか見てないからそこで見方が違うのかもしれないです。でも、藤原先生が言われている「自分でどう建築に對峙しているのか伺いたいです。」



野原 瀬川さんの作品は一回途中で相談を受けてたんですけど、その時聞いた話では、脇に川が流れていたり、鉄道が走ってたり、後ろに斜面が続いていたり、もっと色々な繋がりがありそうなんだけど、その辺までのプレゼンはあるまりなかったのが惜しかったなと。一つ一つの施設のガイドラインとプロトタイプのセッティングの仕方というのは、すごくコンセプトとして出していたけど、じゃあそれが町の中に広がっていくと、どんな作用が起きるのかっていうところまで、見えてきたらよりすごく楽しかったなと思っていました。

高見沢

僕は逗子市の大法法の立地審議会っていう仕事で、実際にそういうのをやってるんですよ。逗子はすごく津波が来て、死人が出るみたいな神奈川県内では問題の街なんだけど、そのような観点がなくて、周りの交通の渋滞とか、近隣迷惑の観点しかないんです。しかし、大店舗を立地させようとした時に、上にヘリポートつけるっていうのもナンセンスなんです。誘致できるのは避難ビルするとか、本当に命を守るためのこととはどこまでできるかっていうことで、それさえできないっていうのが現状なんです。

アイデア自体はおもしろくてよかったんだけど、実際の都市計画という

点で見ると、お金がかかるっていうのもあるし、アイデアレベルっていうのもあってちょっと夢物語すぎたので、そういう面で突き抜けてはいなかった。でも建築家の人たちもああいふ風に言ってくれるっていうことは、そういう作品が評価される時代になりつつあるということでもあるので、心強かったし、考え方自体はすごく面白かった。もう少し言えば、あれは三、四年前の卒制だったかな。安佐南区の土砂崩壊で犠牲者が多かったところで、設計をやりきれなかった人がいたことに比べれば、あのような新天地で新しい防災対策を都市計画的に考えたっていうのは、私たちはすごく嬉しくて、実際に役立って欲しいし、希望の持てる案だったと思いますね。

佐土原 幹線道路沿いというのが、防災的な理屈と合っていて、力強いっていうのはあったと思うんです。商業施設はなかなか防災対策的な役割を果たしにくいっていうのはあるんですけど、最近ではイオンとかが意欲的に全国で色々な展開をやっていたりするので、そういう面も考えられるかなと思います。

高見沢 一部設計に反映はされましたよね。スロープつけて上上がったいくとかは実際のでしたね。

佐土原 いるいる課題はあるんだけど、これが育っていつてくれるといいなっていうのはありました。

高見沢 去年は災害が多かったし、今も災害ではないけど、船の構造とか港をどうするかとかあらゆるものが設計課題だよな。それで僕は研究者中心で一番の本業は研究なので、言いたいことを設計でやってくれると素晴らしいと思います。

尹 都市計画で着目することと建築で着目することはそこまで変わらないと思います。ただ、必ずしも建築でそれらが解決できるとは少なくとも私は思っていないくて、**解決のアプローチが制度であったりソフトであったりするだけで、面白さとか問題に対する着目の違いっていうのはあんまり違いはない**と思いますね。

野原 尹先生が今言ってる感覚は僕もよく思うところで、よく学生の皆さんが、「AD的には」とか「CE的には」とか言われるけど、実際には、あんまり差がある方うには思いません。こちらも「CE的に」喋ってるつもりは全くなくて、ただ設計の案や計画を見て、個人の観点から、ああだこうだ言っているだけなんだけど、皆さんは、なんか違うって言うのでむしろ何が違うのか知りたいなって思うことはありません(笑)。

前のデザインスタジオの課題の成果は知らないからね。

佐土原 VCD系の先生はプロセスを、卒業設計だけじゃなくて随分前からわかっているということですかね。たしかに、うちでも卒業設計をやる人はいて、ゼミで見たりもするけれど、2、3年生でこういう作品を作ったかっていうバックグラウンドまではわからないので、やっぱりものでやりとりしちゃうところがあるかなって思います。

野原 自分が学生だった時は、自分は、都市工学科でしたけど、卒業設計で出ているので、設計を多少していたんですけど、当時、先生の指導は、2回か3回ぐらいしかなかったんで、何か言われたことがほとんどなくて、ほとんど勝手にやっていたんです。なので、自分自身が卒業設計の場面において教わった経験がないから、結局は自分でやることかなって思ってます(笑)。でもそのときに議論してヒントになることがあれば、どんどん拾ってもらって、ヒントにならないことも当然あるだろうってけど、そういうのを選ぶのは設計する自分自身ですよな。そのぐらいのサポートぐらいしかできないかなって思ってます。

高見沢 そこは教育というのをどう考えるかだよな。建築教育というのは同じ先生のもとでずっと一生やるべきなのか、いろんな考え方に接しながら自分を切磋琢磨するかということでも、もしずっと設計でやりたければVCDだとかCEだとか言っていないで設計をやっていけばいいわけですよ。でも逆の話もあって、どういまままで教育されていたかによらずに、4年生になったらVCDの方の指導を受けずに研究室で卒業設計をするという選択肢もある。今後の話にはなるんだけど、都市科学部になって人が増えて、卒業設計をやりたいたいという人も増えたので、今まで通りには多すぎて指導しきれない。一方、我々の分野でももうちょっと専門的な設計というのもあるんじゃないかと。つまり、いままでどうだったかではなくて、新しい環境でもっと科学的な分析に基づく設計とかにチャレンジしてみることってどう道もあるだろうって、話題になったぐらいのことですけど。

野原 一、二年前、佐土原先生のところでもまさに、CEだとかを使って風の解析とかやりながら、解析を元にしてチャレンジするというのがありましたね。それが本当にうまくいったかどうかはわからないけど、そういうのにチャレンジしていく人がもっと増えてもいいよね。

高見沢 今のポキャブラリーでいうなら、最後にVCD的な設計をしなきゃ行けないとなった時に、ジャンプしちゃうのであのような形になったけど、分析したものを純粹に科学的な形っていうことで提案してもよろしいとなれば、また形は違ったかもしれないよね。

奥野 先輩から話を聞いていると研究室で卒制はお勧めはしないよって言われるんです。その理由としては、VCD系は中間講評が3回あって、CE系とか研究室はゼミがあるっていう中でお互いに違うことを言われて悩むからと言われる。確かにやってみると、VCDの先生がこう言われて、都市計ではちょっと違うことを言われて、何がなんだがわからなくなった時はありました。けど、今思えばもっと手を動かせっていうことではあったと思います。

野原 先生が違えば、言うこと違うのは当たり前だよな。CE系とAD系の違いからくる意見の違いではない気がするのだけど、そういう風に言われているなって思っているのが一つと、本当に都市計画で何かやるうって思ったら、さっきの制度の枠組みの中で、**現実的にどう落とし込むとか、そこにある種のテクニックみたいのがあると思うんだけど、卒業設計の段階でそれをするのってすごい難しい**のであんまりそこに対してコメントはしてないと思う。あえていうとするなら、**スケールとか、町ぐらいのスケールで考えるときに考えなきゃいけないこと、部屋のスケールで考えるときに考えなきゃいけないことの違いについて、どちらをどのくらい重視してやるか**みたいな差はあるかなと思うんですけど、それぐらいじゃないんじゃないかなと思う。けど実際に仕事をする時に、一つのものに対する答えの出し方は、建築の先生と研究でやっていることではアウトプットの出し方は違うと思うけれど、考え方は大きな差はないのではないかなと思います。

藤井 VCD系の先生の方はプロセスまで見ていて、一人一人がいままでどういうことを考えてきて、今この状況にいるかということに対して、本質的な問題を投げかけ続けている感じがしています。彼(奥野)の話を普段から聞いていると、CE系のエスキスでは設計のものに対して、「ここはどうなっているのか」とか「ここはこうなっているのか」と言うことを言われないで、そういうところで葛藤しているのかなって思っていました。

一同 (笑)

野原 でもそれは認識が違うかな。さっき言っていた通り、**思想が設計に表れちゃうから、設計を説明できないというのは、そこに思想が込められてないか、込めた思想が表現できていないというところになる**。それで、ここってどういう意味で作っているのっていうのが説明できるということは、そこに自分が持っている思想や考えを込めたか込めていないかっていうことになるのかなって思っているだけなんです。たとえば都市計画の研究室にいてやっていけば、一応僕らもプロセスを多少見てるけれど、それより

佐土原 彼はコミュニケーションを一生懸命やりましたね。それに基づいてどういう形がいいんだろっていうことをずっと模索していました。それはそれその人にとって得るものがあってよかったんだと思います。

奥野 僕個人としてはVCDの中間講評は良い意味でも悪い意味でも影響が大きかったような気がしています。はじめ、研究室で卒業設計とやるんだって決めた時は、分析をしっかりした上で設計につなげられないかって考えてはいたんですけど、日に日にテーマと分析と設計で色々と考えが複雑になって、最終的に振り回されてしまった部分は大きいかもしれないです。

高見沢 奥野くんのテーマは難しかったよね。リサーチすると言ったって、観点がよく分からなかった。雪の越後(藤井さんの作品)(2012年)であれば、視覚から景観というものを分析するとか、手を加えたときにどういうインパクトがあるのかを評価してみるとか、なんとなく科学的なイメージが湧くような気はするのだけども、奥野くんのやつ(2017年)は、子供が育つとか下町の環境とか漠然としたやつだったから、なにをリサーチしていいか分からないというか。なにかリサーチはしましたか？

奥野 結局、敷地を決めてその敷地の周りのリサーチで終わってしまいました。もう少し子どもに関係する行動とかまちの構造とか、子どもに振り切っていたら変わっていたかもしれないです。

野原 時間配分っていうのもあるよね。一応論文をやっている人たちを隣で見ていたと思うんですけど、なんか最初はアンケートが簡単に取れると思っていたら、アンケートの用紙作るだけでも1ヶ月かかって、気がついてたらアンケートを配るのがもう年末ギリギリなっちゃう。毎年そういう話があるのだけど、**要はちゃんと調査しようとするって結構大変なんだよね。結局それやるととそれ終わっちゃうから、今度は出来るだけコンパクトに調査しようとするとかよくわからない結果になっちゃうとか**、そういうのはあるかもしれないね。リサーチをちゃんとやって、それに基づいて設計するというフルパッケージでやるとなると、慣れている人は出来るかもしれないけど、みんなやったことないから、難しいんじゃないかな。どうしても早く出せって言われて焦っちゃうって、コンセプトをパッと出さなきゃいけないじゃない。

見つけるんじゃない、見つかる！

藤井 なんか、卒業設計をパーッとやって思ったことなんですけど、VPO系とかかって何をしているんだらうなって1年を通して思うことが多かったです。VPO系とは言っても環境のことも歴史のことも考えなきゃいけない、結局全部考えなきゃいけない。でも、自分がこれって思ったことを決めなきゃいけない場面もあるんで、たくさんのことを考えなきゃいけないから、設計で答えるってなんだろうと思っただんです(笑)。たとえば1年生の課題の時とかに、歴史専門の人とか、環境専門の人に設計のを見てもらっていたら違ったのかなと思っっています。あくまで環境の問題とかっていうのは座学でしか勉強してなくて、ものを作るっていうことで専門的な知識を得られたっていう感じはしてないんです。

奥野 僕らの認識の中では、V系系の歴史とか計画は2、3年生の時にデザインスタジオで直接関わっているわけですけど、V系系は座学として都市計画とか都市環境の授業はあっても、彼女が言ったような方法で知識を得るような場面というのが、3年の秋の専門に分かれた後にやっている印象があるんです。だから、都市計画や都市環境、防災を考えなきゃいけなくなっちゃった時に、あまり深く考えてきてないからどうしたらいいんだらうかっていうことになるのかなと思ったりします。

高見沢 考えたことないの？授業とってなかった？

藤井 授業とってはいけれど…

野原 でも言い方変えると、歴史とか建築計画は一緒にやってたわけでしょ？そしたらそこについてはわかっているかもしれない。

藤井 でも、わかっているかもしれないけど、やっぱりわかっているじゃない(笑)。

高見沢 そんな簡単にわかるわけじゃないじゃないの。一〇年以上やってなきゃわかんないよ(笑)。

一同 (笑)



藤井

さっきのロードサイドの話とかめっちゃ専門的な話をしていたような気がするんです。そういうリアリティの話を設計の初期の段階で言われたら、すごいグッとくるというか、これじゃダメなんだとか別の方法あるかなとか考えたり出来るのになって思ったりするんですけど。

高見沢

スーパーマンならね。

佐土原

それぞれがすごく専門的な案なので、すごく悩んでいたっていうのはよくわかりますよ。だから、やれることって、そういうふうなセンスを感じるというか、リアリティを全く無視しないで少し感じながらやるか。でもどこかで自分の考えをまとめなきゃいけないから、あることに引っぱられ過ぎるとまとめられなくなるのはありますよ。

野原

諸刃の剣だから。生まれたてのヒヨコ状態というか、最初に聞いちゃったらもうその通りにやっちゃう人もいる。3つぐらい聞いた中で自分で選べればいいけど、そういう余裕もないからなかなか難しいですよ。しっかり学んだ方がいいかもしれないけど、しっかり学んじやうとしっかり学んだところに行っちゃって、抜けられなくなっちゃったりするからね。

佐土原

やっぱり程々にしないとまとめあげられないかなっちゃうよね。

高見沢

グッとくる授業やらなきゃいけないよね(笑)！つまんなくて、記憶に残らなかったのかな…

藤井

そういうことではないです(笑)！

尹

自分の学生の頃を考えると、自分も含めて設計に夢中になっていた学生は、他の授業にあまり興味を持たないことが多々ありました。しかし、低学年のときにいろんなことを学ぶことを怠らずに、アンテナ張って、自分の興味ごとを学び、発見することも重要だと思います。

高見沢

反省してないよね？

尹

少しは反省しています。

高見沢

反省してるの！？僕は全然反省してないよ。僕なんか低学年の時から都市計画に興味あって、建築計画は適当にやってた(笑)。単位を取らなきゃいけないから試験は出たけど、全然授業には出てなかったね。ずっとそ

4	<p>まちや建築に求められているもの</p> <p>奥野 今日の話聞いてみると、VPO的とかVPO的とか学生側で考えようとしている部分が大いなのかもしれないと思いました。</p> <p>高見沢 今、渋谷で防災まちづくりに着手しているんですけど、建築的な視点でオンデザインの西田さんとか、福祉の人とかとやっているんです。我々はそれぞれ持っている才能が違うから、さっきの話みたいにどう違うかの差を自立たせるようにしてる。それは、世の中に求められているのはコラレーションだから、出来るだけ違う人で、違う能力がある人が組むことで今までにないクリエイティブなものができるはずだということだよ。でも、都市イノベーション学部はそういう場所を作っているわけだから、どうして違いについて議論するのかなって思うんだよね。</p> <p>藤井 そうなのかもしれないです(笑)。</p> <p>野原 なんかそれを見つるのが難しいでしょ？こんなこと言つと怒られちゃうんですけど、僕はその間にいる(笑)。</p> <p>高見沢 もし見つける機会がなかったら我々の反省だけど、見つけるんじゃない、見つかる。いろいろやっているうちに見つかるから、それに食いついて楽しんでやっていると、夢中になってできるもんだなって思う。今までそうやって来たわけでしょう？</p>
---	---

<p>奥野 卒業設計だけじゃなくて、実務的なプロジェクトの時はどうでしょうか。</p> <p>尹 社会変化によって建築そのものに求められるものが変わっていく気がします。最近では、ゼロエネルギーとか環境の側面を重視した建築も注目されますし、まちづくりを重視した活動も多くみられるようになっていきます。建築というものが、社会で求められるものになんて変わっていく。それによって建築家の役割も変わっていく。全体がそうである必要はありませんが、少なくともそのような兆しが卒業設計でも現れたり、可能性を見せたりすると、V系系だから違うというよりも、今後の社会を考えるとときにすごく刺激となる材料になり得ると思います。</p>	
--	--

4	<p>奥野 今日の話聞いてみると、VPO的とかVPO的とか学生側で考えようとしている部分が大いなのかもしれないと思いました。</p> <p>高見沢 今、渋谷で防災まちづくりに着手しているんですけど、建築的な視点でオンデザインの西田さんとか、福祉の人とかとやっているんです。我々はそれぞれ持っている才能が違うから、さっきの話みたいにどう違うかの差を自立たせるようにしてる。それは、世の中に求められているのはコラレーションだから、出来るだけ違う人で、違う能力がある人が組むことで今までにないクリエイティブなものができるはずだということだよ。でも、都市イノベーション学部はそういう場所を作っているわけだから、どうして違いについて議論するのかなって思うんだよね。</p> <p>藤井 金子さんの国際学生寮(p2p97)で、自分ではあまり設計しないという作品とか。</p> <p>尹 都市的な視点を持って建築を考えようとする提案にはもちろん興味を持ちますが、普通に設計論そのものにチャレンジしていた作品にも大変興味を持ちました。</p> <p>尹 都市的な視点を持って建築を考えようとする提案にはもちろん興味を持ちますが、普通に設計論そのものにチャレンジしていた作品にも大変興味を持ちました。</p> <p>藤井 金子さんの国際学生寮(p2p97)で、自分ではあまり設計しないという作品とか。</p> <p>尹 都市的な視点を持って建築を考えようとする提案にはもちろん興味を持ちますが、普通に設計論そのものにチャレンジしていた作品にも大変興味を持ちました。</p>
---	---

<p>高見沢 東日本震災は、建築家の方が我々に寄ってきたという感じはすごくあるよね。渋谷駅なんか最たるものだけど、妹島さんたちが既存の縄張りを打破して、街を楽しくするために、建築も建てるし、それをつなぐデッキを作ったし、あるいは気の利かない東京都とか渋谷区とか東急電鉄とかをうまく調整してやりながら、全然違う街になりつつあると思うよ。</p> <p>野原 小嶋さんには渋谷ストリームにどうやって関わったかと本当はいろいろ聞きたかったなと思います。</p> <p>高見沢 僕は聞かなくてももうわかるよ(笑)！行った瞬間に「これはストリームだ」「建築の中に都市ができてる〜」っていうのをすごく感じてね。嬉しかったよ！</p> <p>佐土原 一人一人の人の動きとか。そういうことを小嶋先生と一緒にやりたかったですね。</p>	
---	--

奥野 今渋谷をお話ができましたけども、例えば他の場所で再開発としていいなと思った場所とがありますか？

高見沢 僕日立駅が大好きで、妹島先生にも「日立駅はいいですねー」って言ったんですよ。藤井さんとかが日立駅行ってみるといいと思うよ。僕が感じる日立駅と藤井さんの作品との違いは、妹島さんは無理して建築で風景でまじしたとは言わないんだよね。風景というものをどうやって建築で見せるかだけ考えていて、我々が通勤通学で使っているコンコースというものを使って素晴らしく風景を切り取って人々に感動を与える空間に仕上げている。かつそれが街の中から見ても、余計なものを取っ払って風景を再生している。マイナスの建築みたいな。マイナスの建築の中で風景を再構築しているって感じがして素晴らしいと思う。だからそれができることによってどいてくれたぶんもあるし、いいものができたブラスの面もあるし、駅前の空間自体は普通の整備かもしれないけど、ちょっといい整備だけど、中国人とかいっばいきて観光のために来たりとか。

奥野 佐土原先生は、都市環境や防災という分野が専門ですが、そう言った分野での再開発的なプロジェクトはどついったものなのでしょう？

佐土原 防災的なことだとするんな拠点同士を繋ぐっていうことをやるんです。繋ぐことで両方でバックアップされて、日常からいろんな融通が利く。一緒にやることで色々煩わしいことはあるんだけど、繋がることで得られるものがある。国土交通省の人は、そういう再開発で動いているところの間をつないでいくインフラに対して、色々補助金を出しているんです。

藤井 再開発が進められている2つの場所を繋ぐということですか？

佐土原 そう。それぞれにエネルギーのシステムがあるんだけど、電気も熱も含めてシステム同士を繋いでいくっていうことをやるので、いろんなところが連動しているんですよ。それは見えないところでそういう仕組みが動いているんです。

藤井 たとえば近いところまで行われてるんですか？

佐土原 例えば新宿だと、10の線路の上のデッキを通して、両方向側にある建物を繋いでいたり、高島屋とかはあの辺のデッキを通して、同じようにエネルギーのシステムが繋がってたりするんです。だから、色々な開発が起こっているもの同士をつないで行くようなことが動いていたり、ある拠点ができることで、それを少し伸ばして別のところにつないでいそれ以外にも、斜面地のまちとみちが曖昧になりながら、新しいアーケードのような屋根やみちのようなひろばのようななんとも言えない場の魅力を創出する提案、国際学生寮に生物生態系が有する自然空間の概念を用いて、130人の一人一人の暮らしかたをヒアリングしつつ、それぞれがそれぞれの場を作りあった中で、そっとガイドする構築物とどう呼応するかの実験的建築提案とか、川越の本川越駅をまちの中心として再構築しつつ、川越祭りの山車も入り込める新たな拠点に再生するもの、鉄道用地としてまちを斜めに切り裂いたリニアな敷地が、実現することなく30年塩漬けされ、パルク化されていた場所に対してヘタ地とリニアな空間を今一度ひらこうとするもの、猿島が保存するにはボロボロになりつつあり、特に水の影響があるなかで、水抜きするという機能的解決を建築的空間として挿入してゆくために島に穴を「掘る」提案、などにも惹かれました。それ以外にも、都市的視点で見ると新しく面白いの（郊外のロードサイドを防災面からポジティブに捉えつつルールを作って増築で再構築するもの、美しが丘のいえいえに対して、全部の家に止まるバスがまちじゅうを巡る設定としたとき、家の玄関やガレージをむしろ地域にひらいたリビング的な場として、中間領域を挿入するもの、真鶴の美の基準もある湾の斜面に対してマイランゲージでもある「パースペクティブ」を挿入しつつその場その場ごとのソリューションを生み出すもの）などもありましたが、もう少し、建築と都市やシステムのスケールトリップを実現できたらとても面白かったと思います。

でも、設計って、考えたことを統合してつくりきらないといけなくて、結局いろいろバテしてしまうので、大変だなと思います。やりきっただけでもまず大きな成果、進歩だと思いますが、この熱量を、今後にも活かしてほしいなと思いました。

建築と都市やシステム のスケールトリップ

自分の評価ポイントは、まちや地域の視線があたりつつも、建築まで落とし込むことに向き合うスケールトリップの感覚のあるものです。その中でも、自分がかもし票を入れていたとしたら、林くんと毛利くんと久原くんなどがあったかなと思います。学校解体モノは、毎年何人かチャレンジするメジャーテーマのひとつですが、今回面白かったのは、学校というのは、地域のコミュニティの核として地域にすがられることも多く、廃校は地域にとっても問題となる一方、年々子供は減っていて統廃合せざるを得ない状況というジレンマの中で、生徒の人数が例え一人になったとしても、残りの部分がまちに溶け込んでまちになじむことで、廃校にはしないで施設は残り続けるという発想、そしてそれが尾道の坂や周辺環境に溶け込んで、抜糸のように段々溶けていく感じが妄想された点が興味深かったです。もう少し建築計画として平面上もしくはディテールまで設計できてれば、なおよかったかと思います。もう一方の学校は、小中高合体して1500人も通うという意味で大きな学校なのに、こちらも斜面との呼応や、複数の商店と学校が融合しつつ、学校としてのシステムはかなり丁寧に設計しきっていたリジッドさが、真面目に向き合っている感じでした。商店街にとっても、学校と絡むことでこれまでと違う活気を生むことができることも提示できたら、まちへの提案にもなったと思います。お寺は、谷中って上から見るとほとんどお寺だけど、正直お寺そのものとは関わらずに過ごしてしまうと思うなかで、自らの体験や実家での経験も踏まえ、これからのお寺も考えつつ、まちに緩やかに開かれつつ新しい場を産み出している、お寺と公園の融合のような新しいまちの姿が妄想されました。

・公開審査会では、投票の関係で全作品を見れていないことを理由に採点を棄権されていたため、こちらに総評を載せていただいています。



野原卓

今年、先生方も仰ってた通り、全体としてはレベルが高く、極端に水準の低いようなものはあまりなかった印象です。ただ、個人的には、全体に優秀な「スマート」なものも多く、もう少し、情熱ほどばしるパッション系があってもよかったなあとも思いました。という意味で、甲乙つけがたいが、突き抜ける感じには至らなかった気がします。また、全体に、テーマには嘘がないというか、本当にこのテーマをやりたいのだろうなと素直に開ける提案が多かったのも今年の特徴のように思いました。傾向としては、学校解体モノ、近代の都市づくりで生まれてしまった傷痕の転換モノ（都市計画道路用地の塩漬けとか）、斜面地や里山傾斜地の魅力を地域に溶け込ませて紡ぐモノ、一人の手では建築作れないので人や環境を介させるモノ、モビリティを再考してまちに再インストールするモノ、などが人気のテーマであったかなと思いました。

くということが目に見えないところで起こっているわけです。そういう繋ぐためのインフラにいろんな補助を出していくと、防災性とか環境性とかが高まっていくってことをやっています。

尹 去年まで秋田にいたので、地方都市で再開発だけに絞って考えると、東北の方だとアオーレ長岡とオガール紫波があげられます。

高見沢 オガール紫波が好きなのは都市計画の人じゃない？設計としては大したことないよね。

野原 設計がすごいというよりは、相当コスト管理をしてコストを抑えて設計してると思いますよ。グループを組んでやっている感じですよ。

高見沢 大勢自体がイノベティブだからね。

尹 そうですね。そもそも今の時代において、地方都市で渋谷みたいな再開発は難しいなかで、これらは今後の都市の未来を考えて、いろんな活動や機能を集約化している建築なので、それが結構注目されましたね。

そうなんです。そろそろ終わりにしたいと思います。本日はありがとうございました。

